

## 1 湊町の下田八幡神社例大祭にみる歴史的風致

### (1) はじめに

旧下田町（以下「旧町」という）は、古くから風待ちの港として数多くの船が寄港し、様々な人を受け入れながら、漁業や商業で発展を遂げ、東西海上交通の重要地点として様々な時代の舞台となった湊町である。

歴史の中で、下田が海の関所として着目され始めたのは、元和元年（1615）に、徳川家康と豊臣家との間で行われた合戦（大坂夏の陣）からである。今村伝四郎正長が十騎五十卒をもって下田港の警備を命ぜられたのに始まり、翌2年には正長の父である彦兵衛正勝が初代下田奉行に任命され、往来する船舶を監視するための遠見番所が須崎に置かれた。その後、遠見番所は元和9年（1623）に下田の大浦へ移転し、船改番所として整備された。

下田八幡神社で行われている下田八幡神社例大祭が始まったのがこの頃といわれている。寛永4年（1627）、第2代下田奉行となった今村伝四郎正長は、戦が続いたことによる殺伐とした雰囲気を持ち、30年間の地震・津波等により疲弊した下田町人の意気の高揚と町の活性化を目的として始まったと伝えられている。



下田八幡神社例大祭（太鼓台）

またその形式には、徳川家康が、大坂夏の陣により豊臣氏を下し、大坂城へ入城した際奏でた陣太鼓の調べを取り入れたと伝えられている。

下田八幡神社例大祭は、9つの区と町で行われる祭りで、14台もの太鼓台が地区内を巡幸（「巡行」ではなく本例祭ではこの文字を使用）し、要所で行う太鼓橋が特徴的であることから「下田太鼓祭り」の愛称で呼ばれている。今村伝四郎正長が考えていた町人を力づけたいという思いは今も生き続け、生活に根づいて町の人々をまとめる要素となっている。



下田八幡神社例大祭（太鼓橋）



列をなして巡幸する太鼓台

## (2) 下田八幡神社例大祭を構成する建造物

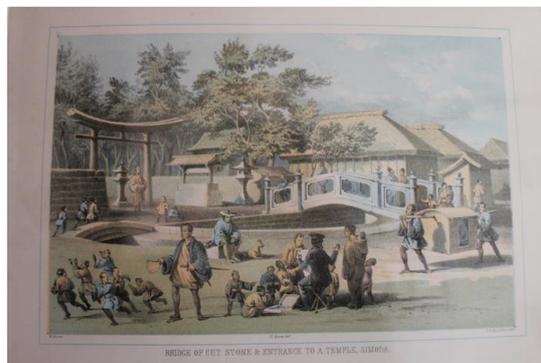
### ①下田八幡神社

#### ア 下田八幡神社の歴史

下田八幡神社は、祭神は菅田別命<sup>ほんだわけのみこと</sup>で、『下田年中行事（江戸時代後期の町政伝承を記録した史料）』には、下田八幡神社の創建は、正応年中（1288～1292）と記述されている。神社の裏山から元禄13年（1700）に鰐口<sup>わにぐち</sup>が発見され、そこには、「下田」の地名と応永6年（1399）の刻銘<sup>こくめい</sup>もあることから、少なくともこの年代には八幡神社の神を祭る集落が存在するようになったと思われる。その後神社は一旦衰退したが、永正4年（1508）11月に再建されたことが古文書『下田八幡神社（江戸中期）』に以下のように記載されている。

「永正4年（1508）11月に下田港内で漁夫が漁をしていたところ、木像1体が網にかかってきたが獲物が獲れない。漁夫は怒ってこれを海に捨てたが、このようなことが6回も繰り返された7度目のとき、数十の鯛と共にまた木像が網の中にあり、これは福神だといって持ち帰った。その夜、漁夫の夢の中にこの木像が現れて、『吾は正八幡大神である。久しく海底に沈んでいたが、いま時が来たのでここに現れた。この地は縁のある土地である。吾が像を安置すれば永久に当地の民を擁護しよう。』とおっしゃった。これを聞いた人々は、驚き喜んで、村を上げてお告げのとおり牛頭天王<sup>ごずてんのう</sup>（現在の副祭神）の傍らに小さな社を設けてお祀りした。ここでお参りする人が祈れば必ずそれに応えられた。」

現在の本殿は、昭和58年（1983）火災により全焼、昭和61年（1986）に再建されている。また、門については、文献に建立時期の記載はないものの、神社宮司によると、現在の建物は、大正中期の建築といわれている。



下田八幡神社の図  
（『ペリー艦隊日本遠征記』より）



下田八幡神社（本殿）



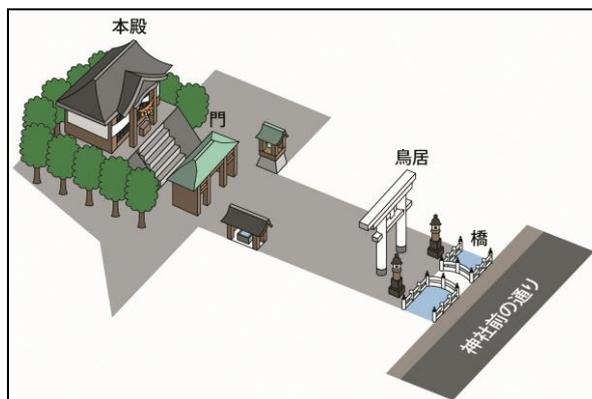
下田八幡神社（門）

### イ 下田八幡神社 石灯籠

鳥居の前には、町内安全を願った住民の寄進による石灯籠がある。石灯籠一対には、柱部分に「献燈」「万延年辛酉（万延2年（1861）春日□（揃力）之）」と刻まれ、八角形の台石には虎や人物像が浮き彫りされている。



下田八幡神社（石灯籠）



下田八幡神社（配置図）

## ② 了仙寺

### ア 了仙寺の歴史（創建）

了仙寺の創建については『下田年中行事』に記述がある。元和元年（1615）大坂夏の陣のとき、今村伝四郎正長は、徳川家康が眼病を患っていたことを受けて、当時眼病平癒の神として崇められていた身延山久遠寺第11世のみのぶさんくおんじ日朝上人にっちょうしょうにんへ祈願した。すると、あっという間に家康の眼病が治ったので、お礼として、日朝上人を開基とした寺を建立する約束をした。今村伝四郎正長が第2代下田



慰霊祭（今村家三代の墓）

奉行のとき、その寺院建立の約束に基づき寛永12年（1635）2月に創建したのが日朝上人を開山とした日蓮宗了仙寺である。了仙寺には、現在も今村伝四郎正長等3代の墓が置かれている。今村伝四郎正長の命日である9月1日には、墓前で、町の人が太鼓を演奏して弔っている。

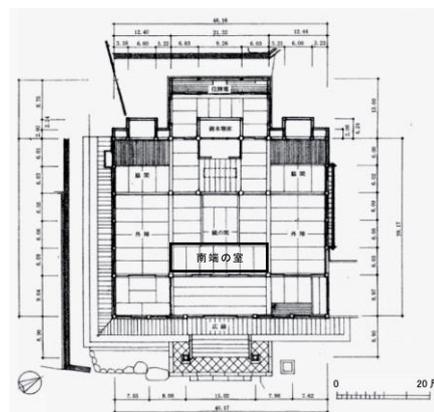
### イ 了仙寺 本堂

『国指定史跡了仙寺山門及び本堂保存修理工事報告書(平成21年(2009))』によると、文化10年（1813）8月、下田町のおよそ半分が焼失した大火災で類焼し、5年後の文政元年（1818）に再建されたものが現在の本堂である。<sup>よせ</sup>寄棟造、<sup>むねづくり</sup>棧瓦葺き、<sup>さんがわらぶ</sup>参拝者が礼拝するため本堂に向拝がついていて、東を正面としている。

正面から一間半を板間とし、南端の室は畳を敷いている。その背面中央に鏡の間と両外陣、さらに背面に一段床を上げて中央に内陣、両側に脇間を配する。内陣奥に<sup>しゅみだん</sup>須弥壇を備え、その背面に本尊を安置する。鏡の間は折上げ格天井、内陣は折上げ天井で貼り、そのほかは棹縁天井となっている。



了仙寺（本堂）



本堂 平面図

### ウ 了仙寺 山門

棟札によると、寛政11年（1799）に建立されている。江戸時代の大火や地震津波の被害を免れ、現在まで保たれてきたが、傷みが激しく、平成21年（2009）に修理している。四脚門で、<sup>きりづまづくり</sup>切妻造、棧瓦葺き、東を正面とする。



了仙寺（山門）

### ③大浦八幡宮

『南豆風土誌（大正3年（1914））』によると、祭神は下田八幡神社と同じ誉田別命で、元々は鍋田にあったが寛永年間に現在の場所に移ったとされている。棟札によると、天明9年（1789）に建立、昭和31年（1956）に再建されている。拝殿は、平入り形式の入母屋造で、向拝がついている。西を正面としている。神殿は、平入り形式の切妻造となっている。



大浦八幡宮（拝殿）



大浦八幡宮（神殿）

### （3）下田八幡神社例大祭の背景となる建造物等

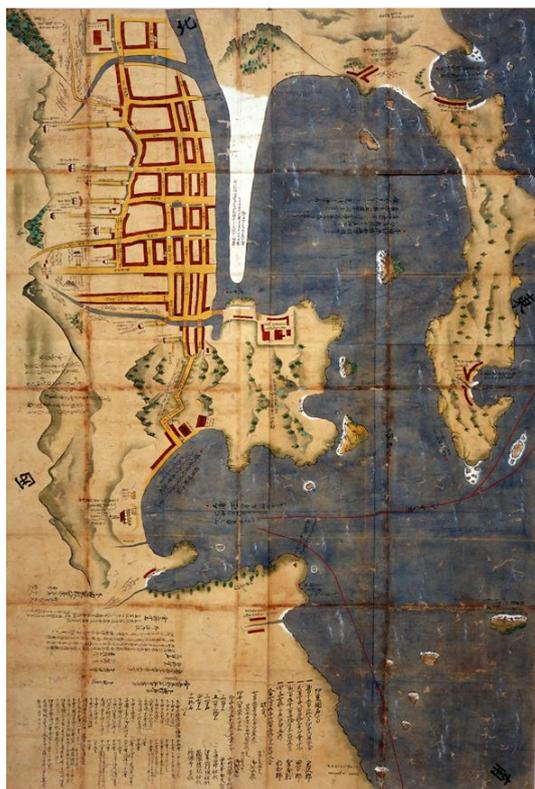
#### ア 旧町のまちなみ

旧町は、東西南北に走る整然と区画された町割りで、海と並行する南北方向は場所により通りが交差点でずれている点などが特徴的である。

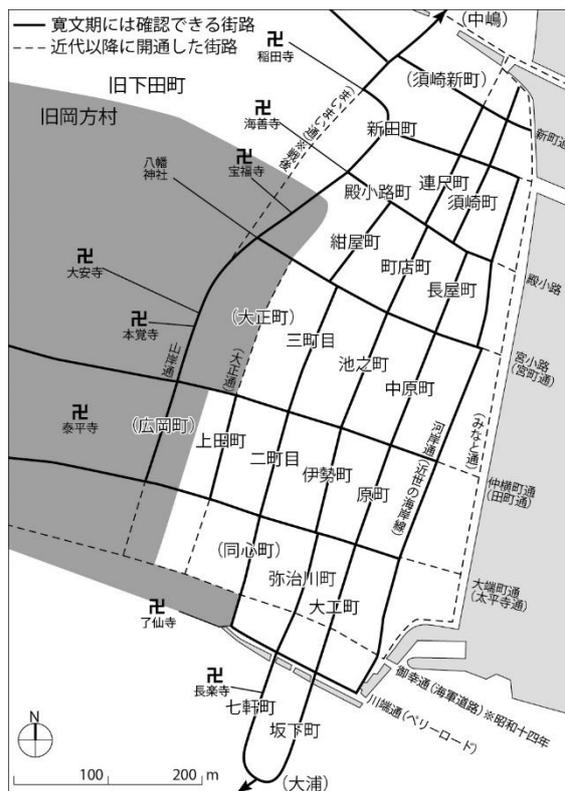
江戸幕府が開かれると、下田領主となった戸田忠次は、現在の海善寺辺りに居館を構え、殿小路を中心に紺屋町や町店町、長屋町、連尺町、須崎町などで構成される初期の下田町が形成された。やがて元和元年（1615）には縄地金山（河津町の鉾山で銀の産出が盛んだった）の繁栄を背景に、人口が増加し、池之町や原町、中原町、嶋之町（伊勢町の旧名）が出現した。そして、寛永13年（1636）に海の関所である船改番所（御番所）が設置されると、入港する船舶は増加し、町は碁盤の目状に整えられた。

第4代下田奉行今村伝三郎が在任中の寛文8年（1668）から延宝6年（1678）にかけて作製されたと考えられる絵図『豆州下田港之図』を見ると、現状に近い下田の町割りが江戸前期には形成されていたことがわかる。

住所が住居表示に変わった現在でも、住民の間では旧町名が使われるが、その多くが江戸時代から使われてきた町名である。



豆州下田港之図（江戸時代）



旧町と通りの名称

### イ 雑忠などの伊豆石やなまこ壁づくりの建造物

下田八幡神社例大祭の舞台となる市街地を構成する歴史的建造物として、雑忠、櫛田蔵、安直楼、鈴木邸、加田邸、土藤商店、土藤蔵ギャラリー、平野屋といった、江戸末期以降に建設された、なまこ壁や寄棟屋根、伊豆石を用いた重厚な建造物がある。



雑忠（安政元年(1854)頃建築）

嘉永7年（1854）に発生した安政東海地震によって、東海地方では全域にわたって大きな被害があり、建物の損傷もおびただしい数にのぼった。ここ下田においても例外ではなく、現在に残る下田のまちなみは、了仙寺本堂と山門などに代表される寺院関係のごく少数を除き、安政東海地震の後に再建された建物がほとんどである。

地震津波と火災の教訓もあり、湊町下田には伊豆石となまこ壁で造られた建物が多し。伊豆石の切り出しと各地への輸送販売は、江戸時代後期から近代にかけて下田の主要産業のひとつであった。民家で使われる石単体の大きさは、高さが概ね7寸、幅は2尺7寸から2尺7寸5分、厚さはおよそ8寸

である。この寸法は近隣で使われている伊豆石の大きさとはほぼ同じであり、1人若しくは2人で抱えられる重さが基準になったものと考えられる。なまこ壁は、海風の強い地域では生命と財産を守る防風、防雨、防火壁として用いられていた。約9寸～9.5寸の平らな瓦をタイルのように外壁に張り、目地を漆喰で半円形に盛り上げたなまこ壁は、瓦の黒灰色と漆喰の白色が対照的なコントラストを見せ、独特な景観を形成している。



櫛田蔵 (明治40年(1907)頃建築)



安直楼 (安政元年(1854)以降建築)



鈴木邸 (明治末期建築)



加田邸 (大正12年(1923)頃建築)



土藤商店 (明治20年(1887)建築)



土藤ギャラリー (明治20年(1887)建築)



平野屋 (安政元年(1854)以降建築)

これら歴史的建造物における寄棟屋根などには、大棟両端の鬼瓦を載せる台座（エブリ台）の様々な文様が表現されており特徴となっている。描かれるモチーフは、火伏せを暗示する波（立浪）が多数を占め、そのほか吉祥を象徴する亀や植物紋、屋号などがみられる。形状は矩形を基本として、数は少ないが瑞雲紋形ずいうんもんがたや木瓜紋もっこうもんなどもある。



エブリ台（波）



エブリ台（亀）



歴史的建造物位置図

### ウ 下田港<sup>かしっばた</sup>河岸端（市道大川端通線周辺）

下田港の河岸端は、以前は石積み護岸となっていて、ガンゲと呼ばれる川に降りる石段や斜路が所々にあり、船が着いたり洗濯したりと、河岸は住民の生活の一部となっていた。昭和56年（1981）には物揚げ場棧橋が建設され、周辺では干物加工場前で干物を干す風景がみられる。下田八幡神社例大祭では、御旅所<sup>おたびしょ</sup>が置かれ、祭りの1日目の夜には、太鼓台の揃い打ち、花火見物が行われる。



河岸端のガンゲ（斜路）



下田港河岸端

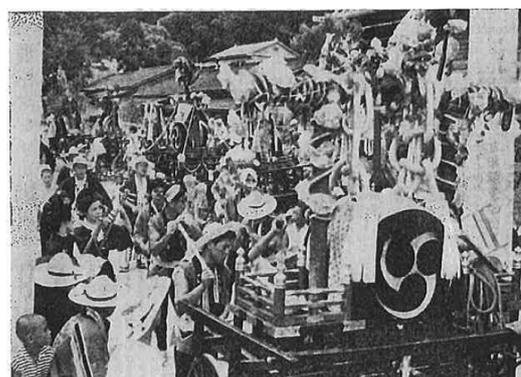


干物を干す風景

## （4）下田八幡神社例大祭

### ①祭りの歴史

下田八幡神社例大祭は、今村伝四郎正長が、第2代下田奉行として赴任してきた寛永4年（1627）以降に始まったと考えられている。下田町人の意気の高揚などを目的として、徳川家康が大坂夏の陣により豊臣氏を下し、大坂城へ入城した際に奏でた陣太鼓の調べを取り入れ、始まったといわれている。



下田八幡神社例大祭  
（昭和36年（1961）広報しもだ）

『八幡神社誌（昭和初期）』によると、寛永年間に御神輿がつくられたとの記録が残っていることから御神輿と太鼓台が町中を巡幸する形の祭りは当時から執り行われていたと考えられている。『下田町の民俗（昭和63年（1988））』によると、明治30年代頃の太鼓台は、まだ素朴で、4人の人夫が担ぎ、人形などののせものも少なく、神輿かつぎ<sup>にくじゅばん</sup>の肉襦袢姿も、明治中期までは見られなかったという見解もあり、現在のよ

うな太鼓橋を積み上げる勇壮な形式は、明治末期以降の変化の中で出来上がったものと考えられる。開催日については、現在は毎年8月14、15日の2日間行われている。明治以前は旧暦の同じ月に行っていたため、9月に行い、台風の時期で暴風雨のあった年が多かったとされている。

## ②祭りを担う人々

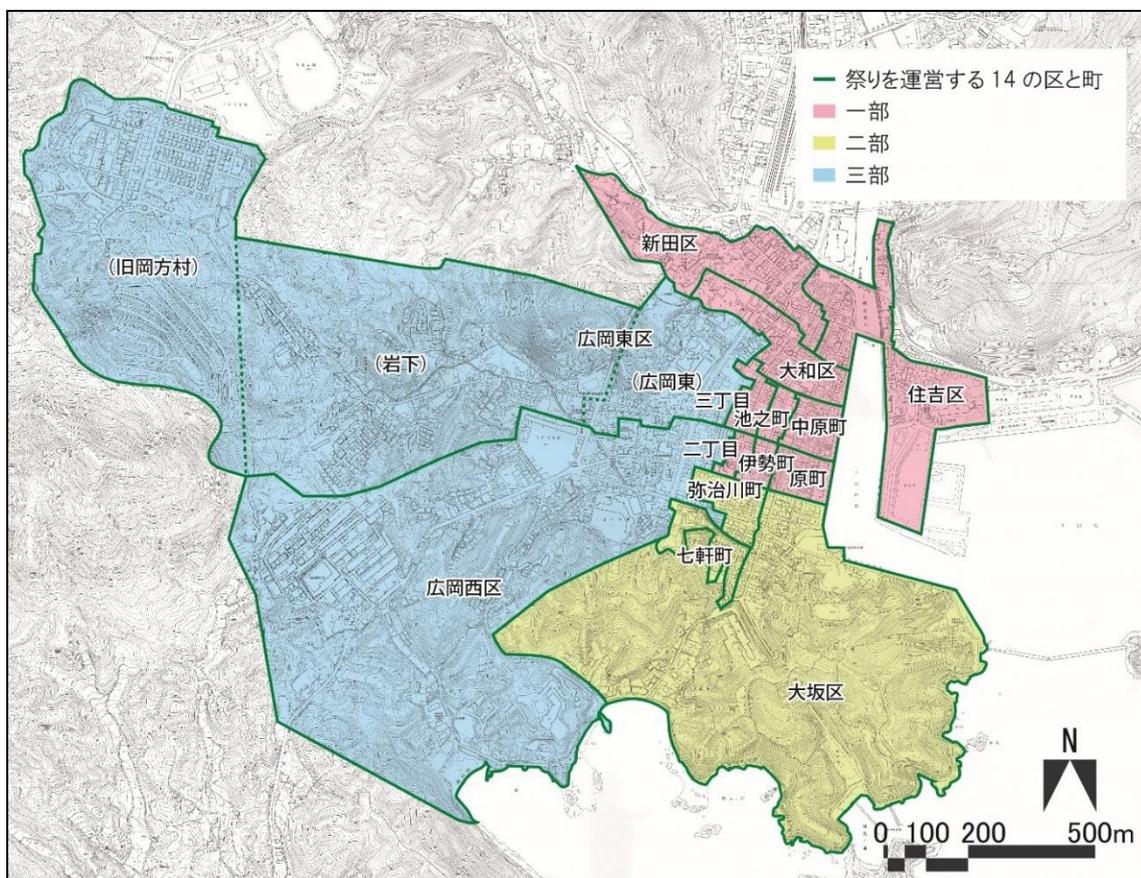
### ア 区分と当番

下田八幡神社例大祭の母体となっているのは旧町である。

旧町は、現在の下田市中心市街地に当たり、江戸時代に下田町として成立し、近接する岡方村と一体化しながら昭和30年(1955)に周辺村と合併するまで存続した町域である。町内はかつて23の町に区分けされていたが、現在は14の区と町となっている。

下田八幡神社例大祭の運営は、この区分けをもとに更に3つの区が一つの部として編成され、三部制で執り行われる。

運営は、毎年輪番制で一つの部が祭典執行部(当番区と呼ばれている)となり、準備と祭典執行の責を担っている。



運営体制区分図

## イ 年齢集団

下田八幡神社例大祭は、年齢階層組織によって運営、実施されている。祭りに参加する人々は、年齢に応じて、若衆（ワカシユウとも言われるが、ここではワカイシユウと表記する）、中老、区役員のいずれかの集団に属する。若衆は各町とも概ね高校卒業から40才前後までで構成されている。したがって40才以上の男性は中老となる。区役員は、中老よりも年齢が上というわけではないが、役がつくと行政的な立場に立ち、祭りでは執行委員として祭り全体の運営に携わる。

## ウ つきあい町

つきあい町は、三部制による祭り実行組織とは別に、個別の区、町の間で仲の良い区、町のあらわれを示す仕組みである。関係を結ぶきっかけは、祭りのとき、町同士がけんかをして、その後仲直りをして以来のつきあいであることが多い。若衆同士の関係であり、中老や区役員などはこの関係には関与していない。若衆は13日の夜、つきあい町まわりと称してお互いに訪問しあう。また、太鼓台にはつきあい町の提灯が上げられている。祭りの際、町と町を結びつけるためのものであり、祭りのとき以外には何ら実効力を持たないものである。

## ③準備

祭りの準備は当番区によって行われる。祭り終了直後に当番区の引継ぎが行われ、来年の祭りの準備が始まる。執行部は祭典執行本部、祭典運営委員、御神輿奉仕委員、若者執行部に大別され、巡路の調整と決定、巡路に基づいた警察や関係官庁への申請書類の提出、パンフレットの作成などを行う。若者執行部は11月には役職を決める。祭り1か月前には関係者100名程集めて「祭典協議全町会議」が開かれる。



祭典協議全町会議

#### ④練習

7月になると各町・区で太鼓台につく笛、三味線、太鼓の楽曲練習を始める。太鼓のたたき方は1番「岡崎」、2番「さん切り」、3番「若竹」、4番「たかどろ」まであり、これを順に練習していく。楽曲に譜面はないため、中老や若衆が小学生や中学生に教えている。



楽曲を教える

#### ⑤祭りの御神輿・金幣・供奉道具・太鼓台

##### ア 御神輿

御神輿は1トンほどあり、25名程で担ぎあげる。鳥居と神社本殿が配置され、金の装飾がきらびやかである。祭神（八幡大神）が移り、祭りの2日間、町内を巡幸する。



御神輿

##### イ きんべい 金幣

金幣とは、棒の先に金銀の紙垂しでを挟んだ道具である。祭神（八幡大神）の分身が移り、御神輿で巡幸できないような場所にある氏子の各家々、路地等をくまなく周り、そこを清めるとともに御神輿にかわり大神の神徳を広めるという役目がある。



金幣

##### ウ くぶどうぐ 供奉道具

供奉道具とは、木枠の台にさかき榊（2基）、2m程の棒の先にほこ鉾（5基）や四神の飾り物（各1基）を掲げた物に担ぎ棒を2本取り付けたもので、11基ある。

四神とは、古代中国において、東西南北の四方の星座をそれぞれ方位をつかさどる神としたものの総称である。東は青龍、西は白虎、南は朱雀、北は玄武（黒色の亀）という。守護神としての四神が東西南北に配置されていれば、祭りの御神輿の安全性が保護されるといわれている。



供奉道具（榎）



四神の飾り物



鉾

## エ 太鼓台

太鼓台の形態は、車輪のついた台の上に鳥居が載っていて、その鳥居に大太鼓が下げられ小太鼓が台にくくられている。また、鳥居の上には各町それぞれの人形が乗っていて、夜になると丸提灯を下げる屋根に取り換えられる。加えて前方には綱がついていて、この綱を各町の子どもたちや役員が引っ張る。町の道路は狭く、3 m程度のところもある。下田の太鼓台などはこの下田の町の道路の幅に合わせて作られている。

各町・区の太鼓台



原町



中原町



弥治川町



七軒町



大坂区



廣岡東



廣岡西



三丁目



二丁目



池之町



伊勢町



新田区



住吉区



大和区

## 下田八幡神社例大祭 太鼓台の人形

町名	人形	備考
原町	<small>にんとくてんのう</small> 仁徳天皇 	八幡神社祭神応神天皇の皇子（神宮皇后、応神天皇、仁徳天皇三代となる）。
中原町	鷹 	若衆に代々伝わる掛絵にある大名行列にちなんだ鷹とケンモク（毛槍）。
<small>やじがわ</small> 弥治川町	<small>おのどうふう</small> 小野道風 	弥治川べりに茂る柳から連想、明治24年（1891）にデザインされたもの。
七軒町	<small>じんぐうこうごう</small> 神功皇后 	<small>たけうちのすくね</small> 武内宿弥が抱いている御子は応神天皇で八幡神社の祭神。神社にゆかりの人形。
大坂区	猿 	火防の神、秋葉神社があるのにちなみ、火防の神としての猿を飾る。
廣岡東	<small>れんじし</small> 連獅子 	能楽「石橋」で豪快絢爛に牡丹の花に戯れる白獅子と赤獅子を連獅子といい、東区、西区が相前後して行列するにふさわしい。
廣岡西	連獅子 	

町名	人形	備考
三丁目	天の羽衣 	昔は金の <sup>お</sup> 鳩と竜。昭和28年(1953)に空を飛ぶ連想から天の羽衣となる。
二丁目	<sup>おおくにぬしのみこと</sup> 大国主命と 協和の文字 	昭和54年(1979)に大国主命の飾り物に新調。福德円満な理想神。
池之町	鶏 	鶏を神の使徒とする伝承もある。町内呉服店主の寄進で平成21年(2009)に修復。
伊勢町	和(唐) 藤内と虎 	<sup>わとうない</sup> 和藤内と猛虎の豪壮な飾り物で、弘化2年(1845)に虎頭を新調という記録。
新田区	<sup>しょうじょう</sup> 猩々 	能楽「猩々の舞」がもととなる。明治30年(1897)の発案。
住吉区	龍 	漁師町として大漁をもたらす龍を選択。
大和区	<sup>すきのおのみこと</sup> 素戔嗚尊 	<sup>あまてらすおおかみ</sup> 天照大神の弟であり、荒ぶる神の代表。下田太鼓台の力強さを表現している。

### ⑥御神輿の巡幸

御神輿担ぎは3部で構成されている。それぞれの部が自分たちの町を巡幸する。巡路にない通りに寄る「跳ね込み」を行い、全ての通りを巡幸する。下田八幡神社例大祭を制定した今村伝四郎正長のお墓がある了仙寺や大浦八幡宮は跳ね込みにより巡幸する場所となっている。

御旅所は一晩神様が泊まる場所であり、御旅所は下田八幡神社からまっすぐ伸びた先の大川端に設置される。夕方、御神輿は御旅所へ入る体制になる。しかし、宮司、氏子総代がなかなか御旅所には入れさせない。3部次々に御神輿が受け渡され、各部が御神輿を行ったり来たりさせる前後運動を繰り返す。御神輿が御旅所に置かれると、太鼓台を迎える準備をする。日も暮れて夜は、御旅所のある大川端沿いで太鼓台揃い打ちと花火大会が行われる。初日の巡幸を終えて快い興奮と疲れを残した町に太鼓の快音が響き渡る。



了仙寺を巡幸する御神輿



御旅所入り



御旅所



大川端に並ぶ太鼓台

### ⑦太鼓橋

太鼓橋をつくるときはまず、上げる場所の手前で道具が止まり、道具進行の掛け声で「櫛一番」などと呼ばれる順に1基ずつ上げる場所に走り込む。次の櫛二番が走り込んで一番に激突すると、2基が一緒になって足踏みを続ける。このようにして次々と道具が連なり、遂には11基が一行になる。11基の供奉道具を綱で結び、両端の若衆が中へ中へと供奉道具



ぶつかり合う供奉道具

を押し込むと、中央部がゆっくりと持ち上がる。しかしながらそう簡単には上がるものではなく、力の勝負で、その場が怒声で満ちる。この時リズムをとるのが拍子木である。拍子木は少しずつテンポを早め、力を高めていく。それに合わせて、太鼓橋は少しずつ上げられていき、ついに半円状の太鼓橋は完成する。すると観客からの歓声と拍手が沸き起こる。



供奉道具を綱で結ぶ



一行になった11基の供奉道具



ぐっと力を入れる



持ち上がった太鼓橋

### ⑧祭りの衣装

肉襦袢にくじゅばん（肉色の下着）に紺の股引を身に着ける。肉襦袢は町の「相馬京染

店」でつくられていて、1枚1枚丁寧に手染めしている。柄は各町によって違い、龍や獅子など異なっている。肉襦袢の地の色は肌色で、柄は刺青を示している。役員などの役職のある人はこの姿に黒の羽織を着る。祭典執行本部員においては黒の羽織に袴を着る。若者執行部の委員長は赤と白と青のたすき、他の若者執行部役員は赤と白のたすきをしている。また、御神輿を担ぐ中老は、部によって赤、緑、黄色の三色それぞれのたすきをつける。笛や三味線を奏でる女性は、鯉ロシャツに股引をはいて、腹掛けを身に着ける。



肉襦袢



役員



色とりどりの衣装（お囃子）



### ◎8月13日の流れ（祭り前日）

13日は祭りの前日で日待ちといわれる。神社では旗上げが行われ、執行部役員は神社で潮浴び（ホンダワラという海藻で海水を浴びる御祓い）を行う。祭りの準備として、当日の休憩場所にもなる日待ち場の設営や各区・町に提灯を上げる。提灯にはそれぞれの町・区の名前が書いてあり、違う町に違う名前の提灯を上げることはない。夜には、つきあい町まわりをして頭取<sup>かしら</sup>同士で盃を交わす。また、各区、町では、全員で盃を交わし、日待ち明けをする。



日待ち場（三丁目）



提灯（新田町）

⑩ 8月14日の流れ（祭り1日目初日）

朝5時頃に金幣が下田八幡神社を出る。金幣の行く手をふさぐことはもちろん、金幣奉仕者以外が触れること、それを地につけることも許されないなか、約4時間かけて神社に戻ってくる。



巡幸する金幣

金幣が巡幸を終えて、各町の太鼓台も神社に集合すると神事が始まる。神事が終わると、猿田彦命、神具、子供の手古舞、「ほーりゃ、ほーりゃ」

の掛け声で子供神輿、次に供奉道具11基、御神輿、14台の太鼓台が、歴史的建造物の雑忠や旧澤村邸、加田邸などがある町へ繰り出す。供奉道具は御神輿と同じ順路で、常に御神輿の前を巡幸し、神様を先導する役目を担っている。御神輿と供奉道具については建物の2階から見るといった見下ろすことをしてはならない。それには神様を上から見下ろしてはいけないという意味がある。

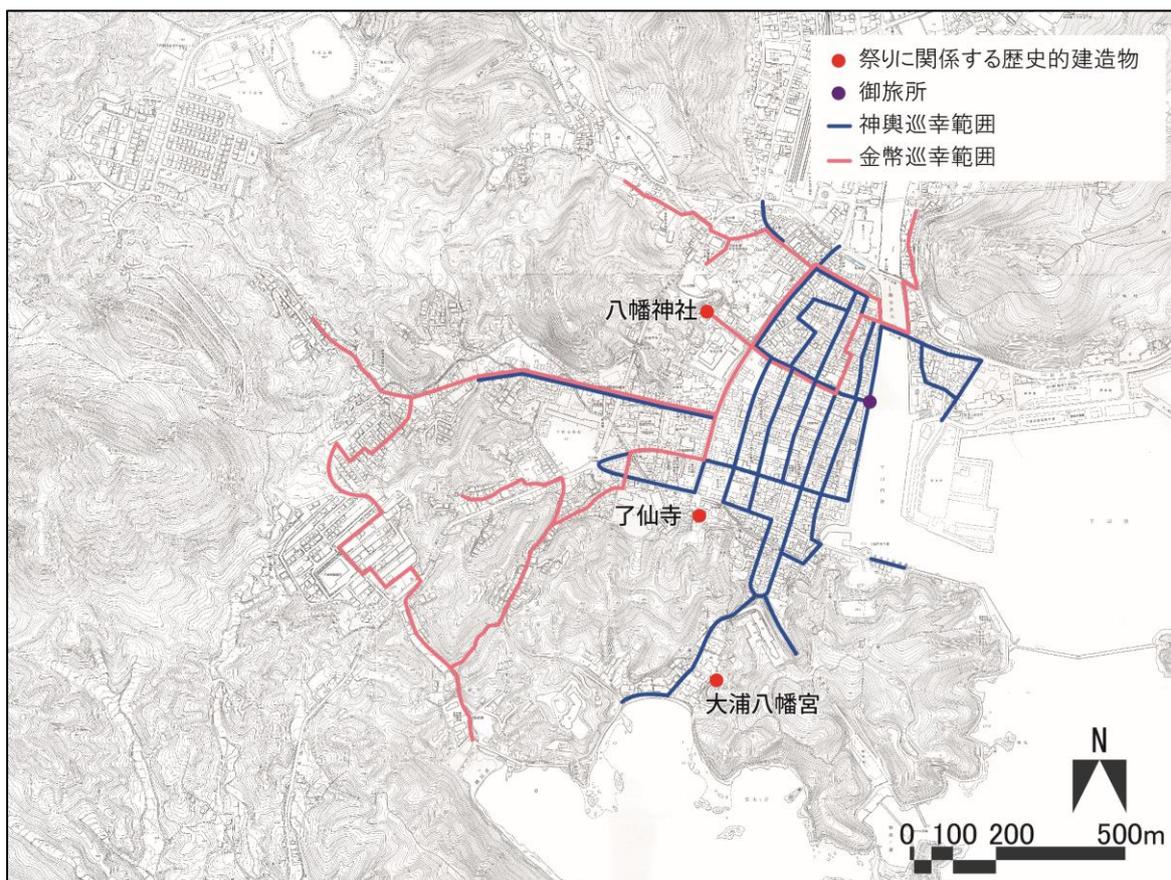


手古舞



子供神輿

供奉道具、御神輿、太鼓台とも巡路は決まっている。しかし、供奉道具が巡路を外れ、観客の方へ向かってくることは祭りの勢いである。巡路に決めごとはないが、太鼓橋を氏子総代の家の前で行うことが唯一の決まりごとである。



金幣と御神輿が巡幸する範囲

## ⑪ 8月15日の流れ（祭り2日目最終日）

### ア 終日の巡幸

2日目は、朝から晩まで巡幸する。朝、御旅所から猿田彦命、神具、手古舞、子供神輿、供奉道具、御神輿、太鼓台が町に繰り出す。日差しの強い8月は、奉仕者自身の熱と日差しの熱で熱気が充満する。雨の日はずぶぬれになりながら巡幸を続ける。

雨の中巡幸する御神輿  
(大浦八幡宮にて)

### イ 接待場所・休憩場所

御神輿の巡幸する経路には所々に接待場所、休憩場所が設けられて、奉仕者ののどを潤す。御神輿は氏子総代の家の前だけは下ろしてもよいとされているため、氏子総代の家の前では休憩のためのおもてなしがなされる。このほか、供奉道具が太鼓橋を作る場所や、御神輿の受け渡しが行われる場所な

ど合計 20 か所くらいの休憩場所がある。接待場所、休憩場所で働いているのはほとんどが女性である。その接待場所を出す家の夫人や親せき、近所の夫人などが集まって切り盛りする。2日間にも及ぶ巡幸の疲れをとるためのこの場所は、祭りにおいて重要な場所である。



接待場所

### ウ お囃子

各町・区の太鼓台にはそれぞれ笛、三味線がつき、お囃子を奏でる。三味線は通常屋内で用いる楽器であるが、以前は、芸者が参加して三味線を奏でていたところから、今では町の女性が三味線を奏でている。記憶に残りやすい軽快なメロディーは奉仕者だけでなく、観客の祭り気分をも高めてくれる。



皆でお囃子を奏でる

### エ 宮入

1日巡幸した下田八幡神社例大祭のクライマックスは宮入<sup>みやいり</sup>である。夜、供奉道具に続いて御神輿が神社に帰還することを宮入という。このときは当番区に御神輿が渡され、当番区が宮入をする。この前後から神社前の通りは大勢の観客で一杯になり騒然となる。神社には氏子総代や執行部役員がつめて宮入受入れの体制に入る。神社の橋の前に供奉道具がやって来る。橋の前まで一気に押し込み、しかしそのまま入れさせるのではなく引き返すといったやり取りを行う。供奉道具は境内に入ると後はとどまることなく神社の門の前まで一気に走る。「よーい、よーい、よーい」と威勢よく3回供奉道具を上げ下げすると、11基と一緒に地面に下ろされる。



宮入（供奉道具）

今度は御神輿の宮入である。やはり供奉道具と同じように、宮司、氏子総代がすぐに境内に入れてしまうのではなく、一気に橋のところまで進むが、制止されてそのまま戻ってしまう。それが繰り返されると興奮が高まっていく。境内に入ると直進して門まで一気に行ってしまふ。そして門の前まで来ると担ぎ手はひときわ高く御神輿を3回上下させ、「よーい、よーい、よーい」と叫んで台の上に御神輿を安置させる。



宮入（御神輿）

祭りのクライマックスを見事に締めくくった、という満足感が、奉仕者の表情を晴れやかなものにする。

最後に太鼓台がやって来る。しかし、太鼓台は神社の前までで境内には入らない。そして1台ずつ神社の前で左右に分かれ、自分の町へと戻っていく。宮入を見るために集まった観客も太鼓台について、若衆の奏でる太鼓の楽曲に祭りの余韻を楽しむのである。

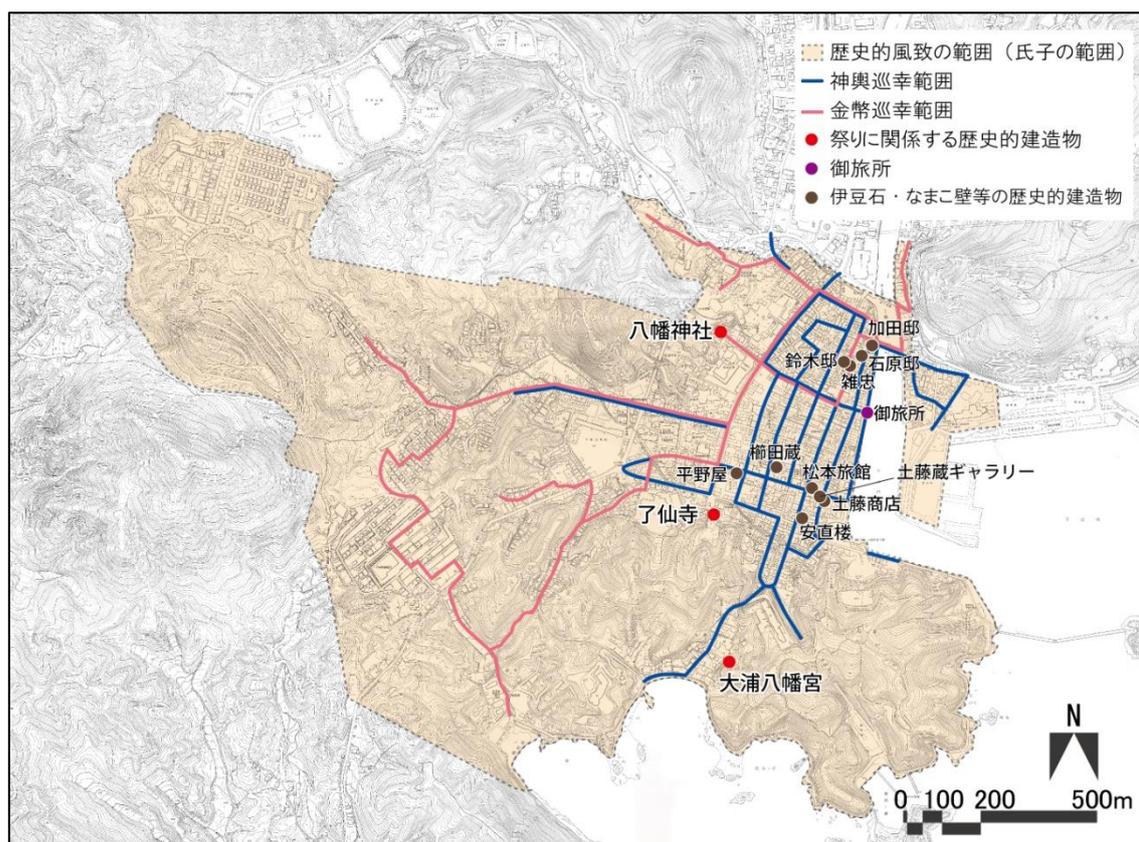


自分の町へ戻っていく太鼓台

### (5) まとめ

毎年8月14日、15日に行われる下田八幡神社例大祭は、江戸時代、第2代下田奉行の今村伝四郎正長が町の人々を元気づけることと町の活性化を目的に創設したもので、その思いは現在も引き継がれ、旧町の人々の活力となり、生活の一部となり、町を一つにする絆となっている。祭りが近くなると太鼓や笛の音が響き渡り、提灯が各所で上げられ、祭りが始まると、祭りの雰囲気町全体から感じることができる。

下田八幡神社例大祭が行われるこの地域は、江戸初期から変わらない町割りを基盤として、下田八幡神社例大祭を伝承してきた下田八幡神社や、この祭りを制定した今村伝四郎正長が建立した了仙寺、また、江戸末期から明治にかけて建てられた伊豆石やなまこ壁の建造物など、長い歴史を生きてきた証が混ざり合い、独特な景観を形成している貴重な町である。このような町は、下田市民にとって、維持、向上させるべき歴史的風致である。



湊町の下田八幡神社例大祭にみる歴史的風致の範囲